活動事例２

「『ニコニコ訪問』は、つながりの１歩」

東区葵学区主任児童委員　明石　雅世

１　地域の状況

葵学区は、地下鉄千種、新栄、車道、高岳駅の４点を結ぶ形で広がっています。その中心を南北に商店街が通っていますが、近年の区画整理に伴い、立ち退きになったり、店を閉めるところもあります。整理された土地には新しくマンションが建ち並び、駅周辺には学習塾がたくさんあります。地元のつながりがまだ残っているかと思えば、個人情報という壁に、新しい人との関係を紡ぐのが難しくなってきています。

また、東区は、「ニコニコ訪問（東区での「赤ちゃん訪問」の愛称)」を全区の中でも早い時期の平成１５年から始めています。少子化ということもあり、第１子に加え第２子以降のお子さんについても訪問を行っています。

２　訪問の仕方

（１）訪問者

主任児童委員２人

（２）持参するもの（ガーゼ以外）

・ひがしニコニコ子育てマップ（東区の情報）
・東区ニコニコ子育てカレンダー（Ａ４版）
・主任児童委員　児童委員のリーフレット
・揺さぶられ症候群のリーフレット
・葵学区のサロンチラシ

（３）心がけていること

学区のサロンのチラシを手渡しし、お母さんや赤ちゃんの友だち作りや情報交換の場になるので一度来てくださいとお誘いします。その流れで、「困ったことありませんか？」「夜、眠れていますか？」「近くに親御さんはいますか？」と尋ねます。

お母さんの声を聴くように心がけ、保健所にも気軽に相談するように促します。そして、最後に、「悩んだり困ったことがあったら連絡をくださいね。」と言って別れます。

３　事例

私自身は、平成２２年１２月に主任児童委員になりやっと１年が過ぎたところです。この１年の訪問で、大きなトラブルはありませんでしたが、“出会う”ことの大切さを感じることができました。

葵学区は、訪問の９割強がマンションで、ほとんどがオートロックです。同じマンションに複数の訪問があっても、一旦エントランスに戻り新たにコールをします。

２重の扉に苦戦しますが、玄関が開いてお母さんと赤ちゃんの笑顔に出会うと、もう帰りの足取りは軽やかになります。そして、翌月のサロンの受付で、訪問した親子の姿を見つけると、「ありがとう。よく来てくれたね」と笑顔で迎えます。また、同じマンションの親子が誘い合って来ているのを見たり、サロンの帰りに携帯電話でアドレスを交換している姿を見ると、うれしい気持ちになります。

私自身も自転車で街中を走ります。買い物の途中で、お祭りの神社で、公園で、保健所で訪問した親子に出会います。「こんにちは。どう？」と声をかけると、「元気ですよ」と笑顔が返ってきます。

人は、顔がつながると出会うものなのです。知らない者同士は、無言で通り過ぎます。でも、一度出会った者同士は、もう一度出会ったときに気づき「先日お会いしましたよね」「また、会いましたね」と、言葉がかけられます。“出会う”ということは関係をつなぐ１歩なのだと思います。

反対に、つながらない、出会えない親子もあります。中国人の親子でしたが、訪問すると不在でした。大家さんに尋ねると、両親は２人とも留学生で、赤ちゃんだけ中国に戻ったと教えてくれました。また、同じ中国人でこんなこともありました。訪問すると、玄関先に女性が３名対応してくれたのですが言葉が通じません。たまたま、春休み中で、対象者のお姉さんで小学校６年生の彼女に説明すると、お母さんと赤ちゃんは中国に帰っていて、３年は帰ってこないということでした。

結局、1 年の訪問を通して、理由がわからない不在が数件ありました。

４　最後に

「ニコニコ訪問」は、地域の子育て情報を伝えるとともに、育児不安や育児の孤立、虐待の防止の観点から、親を地域につなぐことが目的になっています。

親（母親）たちもまた、友だちを探していたり、出会いの場を求めています。訪問時に、公園に行ってもなかなか出会えない、隣近所に同じ年頃の子どもがいない、いるかもしれないけれどわからない、地元ではないのでこの地域のことがわからない、という声をよく聞きます。そういう意味でも、「ニコニコ訪問」は、情報提供やサロンにつながる“はじめの１歩”だと思います。

しかし、実際には、不在・拒否が数件あります。訪問できたとしてもサロンまでは来ない親子も半数以上あります。そういった親子や家庭をどうつなぐかが課題となります。

私は、ボランティアグループで「つどいの広場」も開設しています。すると、他の学区や他区から参加者があり、訪問家庭以外の親子とのつながりを持っています。

名古屋市では、保健所や保育園主催のサロンがあります。民間幼稚園主催の広場もあります。ボランティアグループや NPO 団体が運営しているつどいの広場やサロン、子育て支援事業もあります。よって、そこでの出会いやつながりも１つの選択肢として情報提供をすることも必要であり、そのためにも、子育て応援をしている人たちが出会い、協力し合う関係を紡ぐことも大切なのかもしれません。

「私自身がつながること」その気持ちを持って、またこの 1 年、活動していきたいと思います。